



山椿

Yamatsubaki 95

Kamata Masasato
鎌田 正聰 (30期)



筆者近影

老人の独り言

早いもので司法試験に合格して弁護士になってから、本年すでに45年以上になります。大学を卒業し、横浜で7年間中学の教員生活の後、弁護士になりました。弁護士としての私は、田舎育ち（宮城県栗原市）の人間でもあるためでしょうか、事件そのものもさることながら、当事者の人間性に目が行ってしまいがちです。能力の限界でしょうか。

今年満83歳になりましたが、皆に若い若いと言われてはいますが、やはり晩年を迎えたことを日々意識するようになりました。元気でいるために特にエクササイズ等しておりませんが、東所沢から銀座まで通勤しており、これが足腰やボケ防止に良いのかもしれません。75歳から始めた趣味として、1つは初步的お習字で、近所の公民館で月2回行けるときに通ったりしています。もう1つは、これも初心者のピアノです。昔の童謡でも弾ければと、子供たちが使っていたピアノで、安易な気持ちで習い事を始めました。しかし、これが悪夢の始まりで、右が良ければ左が動かず、左が弾ければ右のメロディーの乱れ、冷や汗タラ

タラ。妻や孫達の冷笑が目に浮かびます。小学校や中学校でもう少し音楽に取り組み、楽譜を読めるだけでも勉強しておけば良かったと悔やまれる日々です。ピアノの先生は、困ったお爺さんだと思われながら「頑張って」と苦笑いしながら励ましてくれていますが、さてさて、月2回のレッスンすらいつまで続きますやら。

世界が激動の時代となるなど、こんなことがあるのかとの思いがいたします。第二次世界大戦から80年余とはいいうものの、地球環境をも変動させかねない人類社会、その中での人間のあがき、それを見つめ、庶民たる私の営み、その中で、苦しみ・あがき・もがいていくのでしょうか。せめて希望と燈火を残し求めて日々を過ごしていきたいものです。

かのラートブルフは第二次世界大戦中に抵抗できなかったことを反省し、「法実証主義」から「自然法」の肯定へと、学説・意見をその著作集に残しています。また、フランクルは強制収容所から生還してなお、生きる心を忘れず、「夜と霧」などを残し、新たな時代に提言したこと等々も思い出されます。「戦場のピアニスト」の苦悩にも涙するばかりです。私は、

どこまで、何と、どのように、誰と対話して、生きていけるのでしょうか。

私にはさしたる能力も余裕もありませんが、先人の方々の苦悩と反省を忘れずに、残り少ない人生を、自己を、家族を、身近でお助けいただいている方々と共に、この社会で、生きる心を、忘れないようにして、生きていきたいと思います。

子供達も独立し、それぞれ家庭を築き、その孫たちの成長を楽しみにしてはいますが、これから世の中、日本は？世界は？どのような方向に向かって行くのでしょうか。

人に寄り添える弁護士を目指してきたつもりではありますが、家族達からは、弁護士なのに、一貫性がない、論理性に欠ける、しっかり記憶してね、冷静に見て発言してね、何度も言わせないで、などと指摘される日々ではありますが、先生方に迷惑かけずもう少し生きていけるのでしょうか。 N_F